

でもね せんせい

2022年11月号内藤アカデミー学童保育教室

「熱中」と「依存」

小谷一史

2年生の絵日記より
「アカデミー・
オータムサミット」

熱中…物事に心を集中すること。夢中になっ
てすること。また、熱烈に
思うこと。

依存…他のものをたよりとして存在
すること。

広辞苑より

秋となり過ごしやすくなり、物事に集中して取り組むには絶好の時期と思いきや、ここ数年は急激な暑さ寒さの繰り返しで体調管理の難しい時期になってしまいました。まだまだ続くコロナ禍と伴って気を抜けない日々をお過ごしと思います。内藤アカデミーでは、寒くなる前に上着を持って行動する。薄着の生徒には声をかけ確認する。汗をかいている生徒をしっかりと着替えさせる。これらのことを意識し風邪をひかないように指導を行っています。保護者の皆さまが安心してお仕事に集中できる環境を作るよう努めて参ります。



<2年>



<2年>

さて、冒頭の「熱中」と「依存」という言葉ですが、私の中で「熱中」とは、何か夢中になって始めたことで、それを活力にして他のことにも良い影響を起こすことを指し、反対に「依存」はそのことばかりに頼って周りが見えなくなることと考えています。この言葉について色々と考え出したのは、私の過去の反省と、最近の小学校高学年から高校生にかけてのスマートフォンへの異常なまでの執着で少し思うことがあったからです。

スマートフォン(以下スマホ)はとても便利なもので正しく使うとそれだけで生活を支える収入を得ることも出来ますし、工夫次第で多くの富を得ることも出来ます。また、自分の弱点の補強や向上にも役立てることが出来ます。これからの時代こういった新しい技術を駆使して成功していく人はたくさん出てきますし、内藤アカデミーの生徒にもそうなってほしいと思っています。欲を言うと、これらの新しいものを生み出す側、つまりスマホなどのIT機器を発明する側になってもらえると、喜びも倍増することと思います。

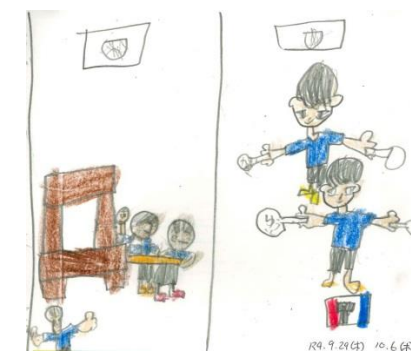
しかしながら現実には小、中、高校生にスマホを正しく使える子が多くいるとは思えません。それでも何かを向上するための活力だったり、経験、知識になるような「熱中」であればよいのですが、苦手な物から逃げたり、その瞬間だけ忘れるための「依存」になっている気が強く感じられます。



<2年>



<2年>



<2年>



<2年>



<2年>



<2年>



<2年>



<2年>

我々の時代にも、いやもっと前から「依存」となるものはたくさんありました。テレビ、マンガ、アニメ、家庭用ゲーム機、外に持ち出せるポータブルゲーム機、オンラインゲーム、スマホゲーム、YouTube、ティックトック、SNS…上げればきりがありませんが、物が変われど親の心配の種であることは変わりませんし、どれも時代を代表するものであることも変わりません。

これらのものを「依存」ではなく「熱中」にするのは簡単ではありません。これらのものは全て商業目的であり継続して使ってもらうために考えられて作られているからです。多くを買ってもらったり、使ってもらったりするための物は大人も判断を間違えるくらいの魔力を持った物になってしまいます。これでは思春期の子どもが「依存」になってしまうのも当然です。反対にスポーツや音楽、芸術と言われる分野は教育的なものが多く「熱中」に持ち込みやすいと考えられます。しかし、スポーツや音楽、芸術を極め日本のトップレベルに昇りつめることはそんな簡単なことではありません。「依存」しやすい物には稼ぐためのアイデアが多く詰まっているのに、「熱中」では稼ぎにくい、この一見すると矛盾に近い難しい現代の状況下で私たち大人が子どもたちの日常をしっかりと「依存」ではなく「熱中」に導いてあげる必要があります。

ここで一つ私の例を書かせていただきます。実は私は思春期のころこの「依存」に悩まされてしまった過去があります。ただ、

高校卒業後に出会った友人たちにより助けられ克服できたのですが、それがなければ今頃どんな生活をしていたのか考えるのも恐ろしいです。私の場合は異例のタイプでスポーツに「依存」してしまいました。私は中学生からバスケットボールを行っていたのですが、小学校時代に少しかじっていたこともあり同学年では上手な方でした。小学校時代は何をやっても中の下だった私にとって、初めて人より優位に立てるものが見つかり、あっという間にのめり込んでいきました。しかしいつの間にかバスケットボールは嫌なことを忘れられる麻薬のような存在になっていました。

スマホとの大きな違いは周りが気づきにくいことでした。傍から見ればスポーツに打ち込む好青年に見えるので心配されたり、注意をされることはありませんでした。一生懸命スポーツに打ち込んでいる少年を温かい目で見守ってくれていたのです。

しかし実際は、嫌いな勉強や時間のかかる学校行事は、全てバスケットボールがやりたいからという理由を付けてサボっていました。バスケットボールができないからという理由で修学旅行に行きたくないという理由で話していたくらいでした。本来学生としてやらなくてはならないことから逃げ、その瞬間の楽しさのためだけでバスケットボールに逃げ込んでいました。それでもスポーツなので進学役に立つのではと考えられますが、「依存」となったスポーツは、得意な練習を繰り返すだけで苦手な練習や、厳しい練習には身が入らないという現実が



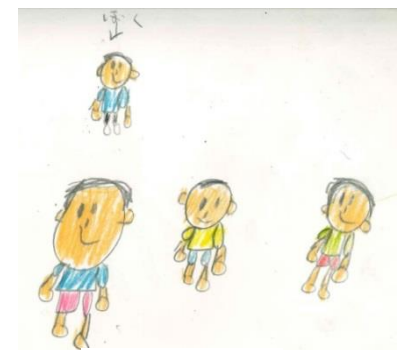
<2年>



<2年>



<2年>



<2年>